

## 学びは楽しい—大学院で学び、在野で問い続ける—

放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻人間発達科学プログラム修士課程  
上岡 美保

修士課程の修了にあたり、これまでの取組や思いを振り返る機会をいただきましたことにお礼申し上げます。十分でなかった多くの事柄も省みながらお伝えします。

### 1. 「I will」から「I do」へ転換する

学校教育に携わる中で、「なぜ学ぶのか」を自身にも生徒にも問い続けてきました。学びはそれ自体が目的であり、自己実現につながる手段でもあります。何より、「知らないことを知る」ことは、今でも素直に楽しい。

大学院で学びたいとの思いは、教職に就いた頃から抱いていました。授業準備に追われながら生徒の前に立つ度に、自分自身のものの見方や考え方を身につけ、自分の言葉で語りたいと切に願っていました。しかし、「いつかしたい」では実現しません。退職の年を迎えた折、無限に続く時間は人には有限であると実感し、「学びたい」、いや「学ぶ」と心が動きました。「I will」から「I do」への転換です。

加えて、折よく出会ったジョージ・エリオットの言葉、「It's never too late to be what you might have been. (なりたい自分になるのに遅すぎることはない)」が、背中を押してくれました。

### 2. 調査研究の入口に立つ

2021年度後期に修士選科生として学び始め、必要単位を修得した後に修士全科生に進みました。

修士課程で最も苦勞し、同時に最も大きな財産となっているのは、調査研究の一端を体系的に学ぶことができたことです。中でも難関となったのは、研究テーマの焦点化でした。自身の課題意識の甘さを痛感し、研究として具体化することの難しさを思い知りました。テーマ設定では、先行研究を読み込み、何が明らかになっていて、何が十分に検討されていないのかを探し続ける必要があります。さらに、アンケート項目の精査、データ分析と考察、論理的な文章化等、一つ一つを積み上げる過程を学びました。また、資料やメモを整理・蓄積することも、研究を支える基盤であることを実感しました。こうした取組において、「アカデミックスキルズ」(必修講座)での学びも有益でした。

### 3. 「完璧ではなく、完成を目指す」

ゼミでは、数週間ごとのオンラインゼミをはじめ、最終段階までマンツーマンで丁

寧にご指導いただきました。その過程で、先生からいただいた「完璧ではなく、完成を目指す」という言葉は、大きな支えとなりました。未熟でも、その時々自分にできる最善の形で完成を目指す。毎回の課題や資料に、愚直に向き合い整理し続ける積み重ねによって修士論文を書き上げることができるのだと思います。

2年目には後輩となる M1 生のゼミで、研究内容を説明する機会を得ました。質問に応じながら一人一人の真摯な姿勢に触れ、自らの在り方を改めて見つめ直す好機となりました。

#### 4. 在野で問い続ける

現在も、仕事と並行して在野の立場で研究を続けています。研究の継続について、先生にご相談したところ、ありがたいことに引き続きご支援いただけることになりました。

大学院での学びは、知識や理論の獲得だけではなく、問いを立て、探究し続ける「学び方を学ぶ」過程でした。また、家庭や職場とは別に、第三、第四の居場所もできました。学びは、孤独に取り組む場面はあっても人を孤立させるものではありません。

やはり「学びは楽しい」。学び続けることは、自身を更新し続けることでもあります。

「I do」への一步を踏み出せば、道を開くための手厚い支援環境が放送大学（院）にはあります。学び続ける仲間がさらに増えることを心より願っています。（1401 字）

## 学びは to be continued

人間発達科学プログラム

片岡 由起子

放送大学の大学院生活を振り返るにあたり、入学前、入学後、修了後の三つの時期に分けてお伝えしようと思います。

### 1 入学前

私が放送大学で学び始めたのは20年以上前のことです。科目履修生として、興味のある科目を少しずつ履修して、一人でコツコツと学んでいました。家事と仕事の両立すらうまくできていないのに、プラス学業なんて…と自分でも思いましたが、むしろそういう時期だからこそ学びたいという気持ちもありました。アウトプットしていく活動の多い家事や仕事を続けるなかで、この先自分には出していけるものが何もなくなるのではないかという不安を感じていたからです。家事や仕事とは違う世界の何かをインプットしたいという思いが強くなり、放送大学で学ぶことにしました。

様々な知識を得るための学びを続けていくうちに、それだけでは何か物足りないような気持ちになってきました。そして大学で卒業論文を書き終えた時、「ああ、やっと学びの入り口に辿り着いた」と感じたことを思い出しました。とは言え、在職中は大学院

受験の準備をする時間も心の余裕もなく動き出せぬまま過ごし、定年退職をして親の介護に向き合うに年齢になった時、受験するなら今だと思ったのです。介護をしていると心の中で内向きの力が強くなり、自分の心のバランスを取りたいがゆえに外に向かう、世界に向かう窓が欲しくなったのかもしれませんが。私にとっては、それが放送大学の大学院でした。

## 2 入学後

入学できたことに安心して、ゆっくり自分のペースで学べばいいと呑気に思っていたが、第1回のゼミでの皆さまのスタートダッシュに圧倒され、何てことを始めてしまったのかと大いに後悔しました。それでも諦めずに続けることができたのは、大切な宝物をたくさんいただいたからです。

一つめの宝物は先生です。取り止めのない私の発表を聞いてくださり、何を迷っているのか、何に苦しんでいるのかを理解してくださり、いつも大きな道筋を示してくださいました。研究に対する考え方や研究の柱となる大きい部分から、枝葉にあたる細かい部分まで、本当に丁寧なご助言をたくさんいただきました。それらをもとに、次のゼミまでに作業を行なっていくことで、迷子になりながらも研究を進めていくことができました。

二つめの宝物はゼミの仲間と先輩方です。年齢も環境も全く違うお仲間に対して、始

めはどのように接して良いのか分かりませんでした。研究をするという大きな目的を同じくする仲間が存在は想像以上に大きく頼もしく、いただいたご示唆は刺激に満ちたものでした。先行研究の論文を整理する方法、おすすめの書籍やアプリの紹介、テーマの絞り方、データ処理の方法など、研究について何も知らない私に手取り足取り平易な言葉で教えてくださり、貴重なご意見をたくさんいただきました。そして専門的な研究をどんどん進めている仲間には、その研究をさらに深められるような問い掛けをしてくださっていました。いつも迷路に入り込んで、出口はおろか進むべき方向も分からなくなり泣きそうになっている時に、「あなたは今、この辺りにいますよ。こういう方向に進んでいくと大丈夫ですよ。」と励まし、道を示してくださいました。先生とゼミの皆さまのおかげで、何とか最後までたどり着くことができましたと思います。心から感謝しています。

三つめの宝物は、大学院で学んだことそのものです。研究はもちろんのこと、研究以外の科目の履修も大変でしたが、その一つ一つが私にとって大きな財産になっています。すぐに仕事に結びつくような内容もあり、家族との関係や自分の生き方を問い直すような内容もありました。年齢を重ねた上での学びの良さは、ここにあるように思います。学んだことを全て、自分の人生に置き換えたり振り返ったりしながら深めることができます。若き日の学生時代に学んだときとは全く違う印象を受けた科目もあり、興味はさらに広がりました。窓は世界に向けて開かれています。

大学院生活2年間とは言え、実質1年半ほどの時間に、研究を行いながら多くの科目を履修していくことはかなり大変なことです。しかし、大学院受験の準備をしている間に大学院科目を少しずつ履修しておく方が良いと説明会で言われていますし、実際にそうされている方が多いようでした。人生の様々なタイミングで、多方向に開く窓から広い世界を眺めることができる、それが放送大学大学院での学びだと思います。

### 3 修了後の現在

論文を書き終えて口頭試問を終えることができたなら、どんなにか胸がスッキリして晴々した気持ちになるだろうとずっと思っていたのですが、実際にはモヤモヤした気持ちが続いていました。学位記授与式が近づいてくると、モヤモヤに寂しさまで加わってきて、何か大きなものを失うような不安な気持ちにもなってきました。しかし学位記授与式に参加された皆さまの輝く笑顔を見たときに、やっと分かりました。大学院での学びは一旦修了したけれど、これで終わりではないのだと。私自身がこの2年間で歩んできた細い道も、ここが終点なのではなく、まだ先へ先へとずっと続いているのだと。ゼミの先輩方にお話を伺ってみると、多くの方が修了後も放送大学で学び続けておられます。私のライフサイクルの様々な場面で、放送大学での学びは私の生活に寄り添い、支えてくれました。そしてこれからもずっと、学びは続いていくものと思います。

## 大学院生活を振り返って

人間発達科学プログラム

金築 朋子

大学院生活を振り返って、授業での学び、ゼミでの学び、合同ゼミでの学びについて、体験を書かせていただきます。

まず、授業での学びについてです。私は元々、医療福祉の現場で音楽療法士という専門職に従事しており、臨床の事例研究は行ったことがありました。ですが、それ以外の研究は知識として知っているだけで実際に行った経験がなく、研究法や統計学などを改めて学び直したいと考えていました。放送大学大学院では、様々な授業を自分のペースで受講できます。研究をすすめていくにつれ、自分にとって足りないと思う分野の授業をいろいろと履修することができました。座学と研究を行ったり来たりしながら様々な研究手法や専門知識を身につけていけたのでとても助かりました。

次に、ゼミでの学びについてです。私が参加していたゼミは、オンラインで月に1回開催されていました。自分の研究について、途中経過を資料にまとめて発表するのですが、このような作業を通して、研究に必要となる様々な力を培うことができたと思います。

ゼミというものに参加するのは初めてで、最初はどのように発表したらよいのかわかりませんでした。ですが、せっかく自分が勉強したくて受験して合格できたので、「この2年間は恥を捨て、とにかく積極的に発表や質問をするようにしよう」という目標をもっていました。最初はとても緊張しましたが、だんだんと発表や質問で落ち着いて自分の考えを伝えられるようになり、ディスカッションできるようになっていきました。発表では、指導教員に毎回様々な視点からの丁寧なご指導を頂けたので、次に何を学び、どのように研究をすすめていけばよいのか明確になっていくのを感じました。他のゼミ生の皆さんも、私の質問へ真剣に答えて下さり、様々な分野の知識を深めることができました。

最後に、合同ゼミでの学びについてです。私が所属していた人間発達科学プログラムでは、夏に研究の中間発表をする合同ゼミがあり、冬に修士論文口頭試問会がありました。つまり、年に2回は他のゼミ生の方々と発表を聴き合ってディスカッションしたり、他ゼミの教授から助言を頂けたりする機会があったのです。他ゼミであっても自分と似たテーマで研究されている方や、医療福祉分野で他職種の方もおられました。そういった方々と意見交換できるのは大変面白く、励みにもなりました。他ゼミなどの先生方の助言も、視野を広げて下さいました。

今こうして振り返ってみると、沢山ディスカッションして、沢山の質問と回答をして、沢山の文章を書いた2年間だったように思います。このように、のびのびと学び、ときに思い切り悩みながら、達成感や充実感を伴って成長させていただけたことは、自分にとってかけがえのない経験となりました。全国各地で頑張る院生の皆さんと切磋琢磨しながら大学院生活を送

れたことに感謝しています。

## 修士全科生としての体験

人間発達科学プログラム 心理学領域

中川 祥治

私は農業関係の調査および教育（大学校運営）を主たる事業としている公益財団法人に勤務しています。自分の業務内容が土壌や作物を対象としたものから、人を対象としたものへシフトしたことがきっかけとなり、放送大学で心理学を学ぶことにしました。最初は認定心理士の取得のみを目標としていたのですが、学びを深めるうちに、学部の心理と教育コースを卒業し、大学院の人間発達科学プログラムへ進むことになりました。大学院入学時の年齢は50代半ばでした。

大学院では学部のような授業もありましたが、指導教員が主宰するゼミへの参加が学びの上で重要な位置を占めていました。ゼミには指導教員だけでなく、ティーチングアシスタント（TA）という人が居て、ゼミの運営上の様々なサポートをしてくれました。学生側のメンバーは、卒業研究履修生（学部生）および修士全科生でしたが、その他にゼミのOBおよびOGの参加もありました。ゼミでは学生側のメンバーが一人ずつ自分の研究の進捗状況を30分前後で発表し、それに対してゼミのメンバーで議論しました。ゼミはZOOMを用いたオンラインで月に2回（2日）程度行われ、その中で私は概ね月1回の発表をしていました。なお、ゼミの運営方法は主宰する指導教員の方針によって変わるので、他のゼミでは若干異なるかもしれません。

さて、私の研究テーマは有機農業の熟達プロセスに関するもの

でした。大学院での授業と自主的な学習（参考文献の閲読など）で知識を得ながら、研究の計画およびデータのとりまとめなどを行い、それをゼミで発表して、参加者で議論していただきました。ここで強調しておきたいのは、ゼミは答えを教えてもらう場ではないということです。答えはゼミでの議論を通してあくまで自分で導き出すことが原則です。そのためには、ゼミ以外でも自分の研究テーマに合う学会に入会して学会発表を行い、広く参加者から意見をもらうことも有効です。実際、私は2年間の修士課程の中で学会での発表を2回行いました。このような経験を通して、研究の計画およびデータのとりまとめは、大きく変化してより良いものになっていきました。これは一人で考えて研究している場合とは大違いです。多くの人の頭を借りて自分の研究を練り上げていくことは非常に重要であると実感しました。

この3月に私は修士課程を修了し、学位もいただきましたが、研究はこれで終わりではありません。研究は最終的に学術誌に掲載されることで、ひとつの区切りになると考えています。現在、修士論文を改訂し、学術誌（入会した学会の発行する学会誌）に投稿する準備をしています。投稿論文はほぼ完成し、これから投稿しますが、今後複数の査読者による厳しい審査が待っています。何とかこの審査を通過して、学術誌への掲載を果たしたいと思っています。

最後に今後修士課程へ入学される方へのメッセージですが、とにかく自主的に果敢に研究に挑戦してってください。たとえ最初は要領が分からなくても、取り組んでいくうちに道筋は見えてくるはずですよ。

私は「米国の大学におけるアカデミック・アドバイジングの実践―スチューデント・サクセスとの関わりに着目して―」をテーマに研究を行いました。大学院の体験談として、リサーチクエストの難しさと、海外での大学院生活の2点をお伝えしたいと思います。

## 1. リサーチクエストの難しさ

修士号や博士号を取得した先輩に大学院を志す上でのアドバイスをもらう際に度々言われていたことは、「リサーチクエストが決まれば、もう論文が書けたようなものだから」というものです。確かに、修士は学部と違い、まず自分が興味のある分野の中から深く研究したいものがあり、その上で、より具体的な研究課題の設定が必要であることは理解していました。先輩の言葉を受けて、出来るだけ多くの文献を読んで自分なりの研究計画を立てて出願しましたが、その時点でもう論文が出来上がったような気でいた自分は大間違いでした。入学してから、テーマ自体は変更しなくとも、リサーチクエストや研究計画はゼミで指摘されて何度も何度も修正し、文献を読めば読むほど自分の立てた問いへの自信がなくなり、何が研究したいのかがわからなくなりました。結局、納得のいくリサーチクエストの設定ができたのは2年次の7月でした。しかし、ここまでずっと足踏みしていたものが、一本の大きな軸ができてからは先行研究、インタビュー調査、結果、考察までの流れをイメージすることができるようになったのです。この時初めて、先輩の言葉が腑に落ちました。

大学院生活は孤独なものかと思っていましたが、私はゼミの先生やゼミ仲間、上司や同僚など沢山の人たちの知恵を借りて、日々相談しながら進めることができました。研究を通して得られる様々な人との出会いや、ああでもない、こうでもないと回り道をしながら自分の納得するまで突き詰めていくことが、大学院の醍醐味なのだと思います。

## 2. 海外での大学院生活

大学の国際担当職員として働く中で、海外、特に米国の大学職員の方々と接する機会が多くありました。日本の大学では、職員は教員のサポート役として働く印象がありますが、米国では多くの職員が修士や博士号を取得し、専門職として様々な交渉ごとや研究発表なども担います。日本の大学でも専門職導入の議論がありますが、5年ほどで様々な部署を経験するジョブローテーション制を採用する大学がほとんどであることが現状です。海外の大学職

員と対等に働けるように知識をつけたいと思ったのが、大学院進学を志した動機の一つです。

また、私が大学院を決める上で重要だったのは通信制であることでした。外国出張などで休日出勤することもあり、通学は困難であると思ったからです。偶然でしたが、大学院の合格と同時に関連機関への出向が決まり、大学院2年目の1年間は米国で研修を受けることになりました。そのため、自分がやりたかった米国大学に関する調査を、現地に滞在しながら行うことができました。私の所属していたゼミはオンラインで実施され、時差も考慮していただいていたので、ほぼ休むことなく出席し、遠隔で指導を受けることができました。慣れない海外生活、そして仕事をしながらの英語でのインタビュー調査や論文の執筆はとても大変でしたが、最後まで妥協せずに取り組み、納得のいく内容にまとめることができました。

私のように、大学院に進学したいけれど海外の大学院への進学はハードルが高いと思っている方は、海外にいながらも柔軟に学ぶことができる放送大学大学院を検討してみてください。

## 昨日わからなかったことが、今日わかるということの意味

人間発達科学プログラム

野崎 英喜

### プロフィール

私は今 65 歳です。地域の小学校で「放課後子供教室」<sup>1</sup> の見守りスタッフとして勤務し、子どもが放課後に集まるサークルでボランティア活動をしています。修士課程を修了してからも、勉強や研究を続けています。今また、住んでいる市の「生涯学習審議会」という場に、市民卒の委員としてたずさわることになりました。

みなさん、私の体験記に目を留めていただきありがとうございます。私はみなさんに、私が修士課程の2年間を通じて得たことの中から、三つのことをお伝えしたいと思います。修士課程で研究し、論文を完成させることにより、そしてそのプロセスを通じて、自分にとってかけがえのない新たな何かを得ることができるのだということに気づきました。では、その三つについてお話しします。

### その1 ものの見方が変わる <人生が変わる>

私の研究領域は、「放課後子供教室」や「放課後児童クラブ」<sup>2</sup> など小学生の放課後の居場所についてです。さて、ここで問いです。放課後の居場所は学校の延長なのでしょうか、家庭の代わりなのでしょうか。それとも、学校でも家庭でもない、第三の場所なのでしょうか。

アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグ<sup>3</sup> は、カフェ・美容室・図書館などを、サードプレイス (third place) とし、それを The Great Good Place と位置づけ研究しました。

オルデンバーグは、サードプレイスについて、家庭でも仕事場でもなく、目立たない、誰でも使いやすい、皆平等で居られる居心地の良い場所と定義し、友だち集団を得、日々の活力を



生む効果があることを実証しました。

一方、放課後の子どもの居場所の実際をみると、オルデンバーグが定義したことが、ほとんど全ての事柄で符合しています。また、学校の教師や保護者に対するアンケート調査は、多くの教師や保護者が、放課後の居場所が家庭や学校と同じではないとの認識を持っている実情を浮き彫りにしています。少し乱暴ですが、これで「放課後の居場所がサードプレイスである」という認識が正解であることを理解いただけたと思います。

そうなると、放課後の居場所は、学校や家庭とはちがう独自性あった方が良いのではないかと、スタッフは「先生」ではなく別の呼び名の方が良いのではないかと。こんなことが導き出されます。ものの見方が変わるといったのは、このことです。そしてこれは、次の研究課題にもつながっていきます。

学問や研究とは、このようなプロセスを通じて仮説を立証していくこと、そしてそれを繰り返していくことだということが、最近ようやく腑に落ちるようになってきました。

## その2 人のつながりが増える <世界が広がる>

放送大学は、放送授業による単位取得がウエイトとしては大きいですが、対面やWEBによるゼミ、さらにはゼミ合宿など学習や研究の機会は多様です。そしてその折々に、学生と先生方、あるいは学生同士で、互いに知己を得、深めることが可能です。研究テーマはそれぞれ別ですが、研究という共通のプロセスを進む中での出会いは、それ以外のどれとも違う新鮮でかけがえのない出会いとなります。

私達のゼミでは、9月にゼミ合宿を行い、学生、OB・OG、指導陣が、WEB参加を含めあわせて20名、新潟県の長岡に集合しました。私も、片道570キロを運転し参加しました。ゼミの場での指導・議論は当然辛辣ですが、県内を移動するとき、私たち同期3人で乗った車の中では、研究のこと、家族のこと、仕事のこと、互いに素のままに話しました。私たちは、同じ道を進んでいることを実感し合いました。

## その3 学生生活を楽しむ <心が豊か和やかになる>

「ああ、学生の頃は良かった」という言葉を耳にすることがあります。私も同感です。そ

うです、学生になれば良いのです。そして番外も含め、学生生活を楽しみましょう。

大阪梅田の串かつ屋のカウンター席でのことです。隣りに若者が座りました。とりとめのない会話の中で「仕事は何をしてはるんですか？」と聞かれたので、「学生や」と応えました。「えっ、何の？」と続けて聞かれたので、「M2 や。教育学の領域で勉強・研究をしている」と。その学生は理工系の M1 でした。『何でこのオッサンが』と不思議そうな顔をしながら、



分野の違う私の研究領域についての話、修士論文を書き進めていくことの苦心についての話、彼は次々と質問し、私は話しました。

また、京都のラーメン屋では、店内に学生に煮玉子トッピングサービスと貼ってあったので、私は迷わず学生証を出し、煮玉子を頂きました。その美味しかったこと。

### さあ、みなさん

放送大学は、英語で The Open University of Japan と表記するのをご存知ですね。放送大学はその名のとおり開かれた大学です。さまざまな年代の、さまざまなバックグラウンドを持つ学生が、共に学び研究する場です。昨日わからなかったことが今日わかることの意味するところをご理解いただけただけでしょうか。門は開かれています。

---

<sup>1</sup> 2007 年から実施されている、文部科学省が主管する放課後児童のための予算事業。

<sup>2</sup> 厚生労働省が主管する法定事業。学童保育という呼び名で広く知られている。

<sup>3</sup> Ray Oldenburg (1932–2022) アメリカの都市社会学者。市民社会を機能させるインフォーマルな集いの場の価値と重要性を説いたことで知られる。主著『サードプレイス』みすず書房,2013,忠平美幸訳